

# 『摂大乘論』における依他起性について

薊 法 明

## 1 問題の所在

『摂大乘論』(*Mahāyā-saṃgraha*, *Theg pa chen po bsduṣ pa*)は無着<sup>1)</sup>(Asaṅga)の代表作であり、その題名は「大乘を包括した論」を意味するものである。『阿毘達磨大乘經』にすなわち大乘のすぐれた点が十種あるとして、唯識思想に即して著されたものである<sup>2)</sup>。その十項目の章立ての中の一つに、所知相としての三性がある。これに伴い、主に「所知相分」第三に三性説が説かれている。既に指摘されているが<sup>3)</sup>『摂大乘論』においては、依他起性を中心として三性説を構成しようとする試みがなされている。一般的に三性説は遍計所執性(*parikalpita-svabhāva*)、依他起性(*paratantra-svabhāva*)、円成実性(*pariniṣpanna-svabhāva*)の順番で提示ないし説明がなされるが、『摂大乘論』においては依他起性、遍計所執性、円成実性の順で示されており、その後三性それぞれについての説明がなされている。であるから、著者である無着の三性説に対する意図、つまり依他起性を三性の中心とする意図がうかがえるのである。それに対して、無着の独自の見解に基づいて『瑜伽師地論』(*Yogācārabhūmi*)を解釈して書いたとされる『顯揚聖教論』などにおいては、このような三性説に関して無着の独自の見解が見出すことはできない<sup>4)</sup>。それ故、無着の主著とされるこの『摂大乘論』における考察が重要なのである。

そこで本稿は、『摂大乘論』における三性の具体的な内容、特に依他起性の記述を中心に考察し、その基本的性格を確認することを目的としたものである。

## 2 『摂大乘論<sup>5)</sup>』における依他起性

### 2.1 『摂大乘論<sup>6)</sup>』における三性説<sup>7)</sup>

『摂大乘論』は「所知相分」を中心に三性説<sup>8)</sup>を説いている。

知られるべきものの相(所知相)はどのように考えられるべきかと言えば、それは、要略して三種である。依他起相と遍計所執相と円成実相である。その中で、依他起相は何かと言えば、アーラヤ識を種子とし、虚妄分別によって集められた表象の〔相〕である。

—— 中略 ——

その中で、遍計所執相とは何かと言えば、〔外界の〕対象は存在しないにもかかわらず、ただ表象のみであるものが対象そのものであるかのように顕現したものである。その中で円成実相は何かと言えば、依他起相そのものにおいて、対象としての相があらゆる意味で無いということである<sup>9)</sup>。

以上が、『摂大乘論』における基本的な三性の内容である。それは、三性の定義をまとめて述べている点からもわかる。また、三性説と識説と虚妄分別(abhūtaparikalpa)の関係が説かれており、この点は重要である。まず、依他起性に関しては、虚妄分別によってあつめられた表象であるとしている。これに対し、遍計所執性は、この依他起性が表象として顕現したものである。この際、依他起性は、遍計所執性が現じる所依となっている<sup>10)</sup>。円成実性は、依他起性において、それが義を現じる所依となり、義が顕現しているとしても、その義がいかなる意味でも存在しないというあり方のことである<sup>11)</sup>。よって『摂大乘論』の三性をまとめると、

依他起性 → 虚妄分別によって集められた諸表象(vijñapti)

遍計所執性 → 表象(vijñapti)の顕現、対象

円成実性 → 依他起性中の対象(遍計所執性)の無

となる<sup>12)</sup>。『摂大乘論』の三性説について他の諸経論<sup>13)</sup>と大きく相違する点は、前述の如く三性に関しては、依他起性を第一に述べることで、中心的な思想として位置付けていることである。また『摂大乘論』においては、アーラヤ識(alaya-vijñāna)を説き、十一種の表象との関係が示されている<sup>14)</sup>。

## 2.2 『摂大乘論』における依他起性

次に、『摂大乘論』における依他起性について考察を行う。上記にもあるが、『摂大乘論』における依他起性についての記述は以下のごとくである。

/ de la gzhan gyi dbang gi mtshan nyid gang zhe na / gang kun gzhi rnam par shes pa'i sa bon can yang dag pa ma yin pa kun rtog pas bsdus pa'i rnam par rig pa'o // de yang gang zhe na / lus dang lus can dang / za ba po'i rnam par rig pa dang / des nye bar spyad par bya ba'i rnam par rig pa dang / de la nye bar spyod pa'i rnam par rig pa dang / dus kyi rnam par rig pa dang / grangs kyi rnam par rig pa dang / yul gyi rnam par rig pa dang / tha snyad kyi rnam par rig pa dang / bdag dang gzhan gyi bye brag gi rnam par rig pa dang / bde 'gro dang ngan 'gro dang 'chi 'pho dang skye ba'i rnam par rig pa'o // de la lus dang lus can dang za ba po'i rnam par rig pa gang yin pa dang / des nye bar spyad par bya ba'i rnam par rig pa gang yin pa dang / de la nye bar spyod pa'i rnam par rig pa gang yin pa dang / dus dang grangs dang / yul dang / tha snyad kyi rnam par rig pa gang yin pa de ni mngon par brjod pa'i bag chags kyi sa bon las byung ba'i phyir ro // bdag dang gzhan gyi bye brag gi rnam par rig pa gang yin pa de ni bdag tu lta ba'i bag chags kyi sa bon las byung ba'i phyir ro // bde 'gro dang ngan 'gro dang 'chi 'pho dang skye ba'i rnam par rig pa gang yin pa de ni / srid pa'i yan lag gi bag chags kyi sa bon las byung ba'i phyir ro //<sup>15)</sup>

訳：その中で、依他起相は何かと言えば、アーラヤ識を種子とし、虚妄分別によって集められた表象の〔相〕である。それ〔の表象〕は、どの様なものであるかと言えば、身体と、身体をもつものと、受用者（経験されるもの）の表象と、応受（それによって経験されること）の表象と、正受（それを経験すること）の表象と、時間の表象と、数の表象と、場所の表象と、言説の表象と、自と他を区別する表象と、善趣と悪趣と、〔死んで輪廻の中での〕中有と、生まれようとしていることの表象とである。その中において、身体と、身体をもつものと、受用者の表象と、応受（それによって経験されること）の表象と、正受（それを経験すること）の表象と、時間の表象と、数の表象と、場所の表象と、言説の表象は名言熏習種子から生じているからである。また、自と他を区別する表象は、我見熏習種子から生じ、善趣と悪趣と、〔死んで輪廻の中での〕中有と、生まれようとしていることの表象は、存在の支分の熏習から生じているからである。

/ gal te rnam par rig tsam don snang ba'i gnas gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid yin na / de ji ltar na gzhan gyi dbang yin la / ci'i phyir na gzhan gyi dbang zhes bya zhe na / rang gi bag chags kyi sa bon las skyes pa yin pas de lta bas na rkyen gyi gzhan dbang yin no // skyes nas kyang skad cig las lhag par bdag nyid gnas par mi nus pas

na gzhan gyi dbang zhes bya'o /<sup>16)</sup>

訳：もし、ただ表象のみが対象として顕現している所依が、依他起性であるならば、そのことがどうして依他起と言われるかと言えば、自己の熏習の種子から生じているから、それ故に、縁という依他起である。生じ終わってから、一刹那以上長くは自ら存在することができないから、依他起であるといわれる。

/ gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid la rnam pa du yod ce na / mdor bsdu na rnam pa gnyis te / bag chags kyi sa bon gyi gzhan gyi dbang dang / kun nas nyon mongs pa dang / rnam par byang ba'i ngo bo nyid yongs su ma grub pa gzhan gyi dbang ste / gzhan gyi dbang rnam pa 'di gnyis kyi gzhan gyi dbang ngo /<sup>17)</sup>

訳：依他起性は何種類に分けられるかと言えば、要略して二種である。熏習の種子というの依他起と、清浄と雑染に関して本性上は成立していないという依他起とである。これら二種類により、他に依ることによって依他起である。

/ chos mngon pa'i mdo las chos ni gsum ste / kun nas nyon mongs pa dang / rnam par byang ba dang / de gnyi ga'i char gtogs pa'o zhes bcom ldan 'das kyi gang gsungs pa ci las dgongs te gsungs she na / gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid la kun tu brtags pa'i ngo bo nyid yod pa ni kun nas nyon mongs pa'i char gtogs pa'o // yongs su grub pa'i ngo bo nyid yod pa ni rnam par byang ba'i char gtogs pa'o // gzhan gyi dbang de nyid ni de gnyi ga'i char gtogs pa ste / 'di la dgongs nas bka' stsal to /<sup>18)</sup>

訳：『阿毘達磨（大乘）経』において、世尊が「法は三つである。雑染分に属するものと清浄分に属するものと、その二分に属するものである。」と説いたのは何を意図して説いたのかと言えば、依他起性の中に遍計所執性があることが雑染分に属する。（また依他起性において）円成実性があることが清浄分に属する。依他起性そのものがそれら二分に属するものである。このことを意図して説かれたのである。

/ de lta bas na yang dag pa ma yin pa kun tu rtog pa'i rnam par rig pa gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid de ni gnyi ga'i char gtogs pa yin te / sa khong na gser yod pa la sa'i khams bzhin no //<sup>19)</sup>

訳：それ故に虚妄分別の表象である依他起性は二分であるのであって、金を藏している土の要素の如くである。

まず、虚妄分別の説明を述べた後、十一種類の表象（vijñapti）によって依他起性を説明している。この表象については次節で詳しく述べるが、上記の記述においても、依他起性は虚妄分別によって集められた表象であるとしている点からもこの三者の関わりは微妙である。次に依他起性は、自己の熏習の種子から生じており、かつ刹那滅であることが示されている。そして、その後には

二分依他と説く部分があり、『阿毘達磨大乘經<sup>20)</sup>』を引用して諸法には雜染分・清淨分・雜染清淨分の三種があるということを述べ、遍計所執性は雜染分であり、円成実性は清淨分であり、依他起性は二つの部分を有している事が説かれている<sup>21)</sup>。

そうなると『摂大乘論』の依他起性を解明する場合、やはり依他起性が表象であるという点が重要であると考えられる。

### 3 表象

#### 3.1 表象について

表象<sup>22)</sup> (vijñapti, rnam par rig pa) という語に関しては種々の研究がある<sup>23)</sup>。これを踏まえて考えると、『摂大乘論』以前のvijñaptiと『摂大乘論』におけるvijñaptiの扱われ方の違いなどが重要であり、かつ問題点であると考ええる。もちろん『摂大乘論』以外の唯識の諸文献<sup>24)</sup>においても、表象 (vijñapti) という語は用いられるが、『摂大乘論』のvijñapti程に重要な意味を持っていたかどうかは疑問である<sup>25)</sup>。

そこで、次に「表象」について考察を行う。

#### 3.2 『摂大乘論』における表象について

『摂大乘論』における表象については「所知相分」(II・2)において詳しく述べられている。それによると、依他起性を虚妄分別によって集められた rnam par rig pa (=vijñapti) いわゆる表象であると定義づけている。

この依他起性は、『中辺分別論』においては「虚妄分別」(abhūtaparikalpa) とされ、また上記のように『摂大乘論』においては「表象」(vijñapti) であると定義されている。これらの概念は依他起性の性格を知る上で重要であると考えられる。そこで、「なぜ、このような表現を使って依他起性を表現するのか」という疑問が生じてくる。まず十一の表象について示す。(以下の本文中における表象については①～⑪の数字によって表す。)

- ① 身体〔の表象〕〔lus〕
- ② 身体の所有者〔の表象〕〔lus can〕
- ③ 受用者（経験されるもの）の表象〔za ba po'i rnam par rig pa〕
- ④ 応受〔それによって経験されるところの〕表象〔des nye bar spyad par bya ba'i rnam par rig pa〕
- ⑤ 正受〔それを経験するところ〕の表象〔de la nye bar spyod pa'i rnam par rig pa〕
- ⑥ 時間の表象〔dus kyi rnam par rig pa〕
- ⑦ 数の表象〔grangs kyi rnam par rig pa〕
- ⑧ 場所の表象〔yul gyi rnam par rig pa〕
- ⑨ 言説の表象〔tha snyad kyi rnam par rig pa〕
- ⑩ 自と他を区別する表象〔bdag dang gzhan gyi bye brag gi rnam par rig pa〕
- ⑪ 善趣と悪趣と、〔死んで輪廻の中での〕中有と、生まれようとしていることの表象〔bde 'gro dang ngan 'gro dang 'chi 'pho dang skye ba'i rnam par rig pa〕

そして、①～⑨は、言葉による熏習の種子 (mngon par brjod pa'i bag chags kyi sa bon) から生じ、⑩は、我見の熏習の種子 (bdag tu lta ba'i bag chags kyi sa bon) から生じ、⑪は、存在の支分の熏習の種子 (srid pa'i yan lag gi bag chags kyi sa bon) から生じることを述べている<sup>26)</sup>。

『摂大乘論』においては、ここに初めて「表象vijñapti」の語が用いられている。この語は前章のアーラヤ識以下の八識の「識」vijñānaと通じて用いられるが、「唯識」という時は一般に専らvijñaptimātraという<sup>27)</sup>。ただ、vijñānaが「知ること」「認識すること」という知の作用よりも、表現され知られている内容を具体的に指す場合が多い<sup>28)</sup>。十一種の内容を見てわかるように、かなり具体的なものとして、表象が示されている。そこで、この十一種の表象に関して、既に述べられている点を含め以下に重要であると思われる点を示す。まず、この十一種の表象がはじめから十一種であったのかという点である。というのも『摂大乘論』の世親及び無性の註釈には、十一という法数が出てくるが<sup>29)</sup>、『摂大乘論』自体には、表象の法数は示されていない。かつ、最古訳とされる仏陀扇多訳においては、②の身体の所有者〔の表象〕に該当する部分が見当たらない<sup>30)</sup>。そうなると、はじめから十一種であったのか疑問が残る。

次に、十一種の表象の記述は、『摂大乘論』の他に『顕識論』にも見られる<sup>31)</sup>。それによると、「一切三界唯有識」の識が顕識と分別識とに大別され、

顕識には九種、分別識には②と③との二種があるという次第で、十一種の表象の詳細な論述が見られる<sup>32)</sup>。しかし既に指摘されているように、『摂大乘論』と同じく十一識を述べるにしても、『摂大乘論』の如く、それら十一識は阿頼耶(本識)の種子から顕現されたものであると述べていない<sup>33)</sup>。そうなると②と③との二種が問題となってくる。これを踏まえ①～⑤に対する世親及び無性の註釈の相違について触れる<sup>34)</sup>。以下にその相違を示すと<sup>35)</sup>、

【世親 (Vasubandhu) 釈 (チベット訳及び漢訳) <sup>36)</sup>】

- ①眼等の五界
- ②染汚意 (真諦訳は染汚識)
- ③眼界
- ④六外界
- ⑤六識界

【無性 (Asvabhāva) 釈 (チベット訳) <sup>37)</sup>】

- ①有色根 (五根) としての顕現
- ②意
- ③意識
- ④諸外処
- ⑤五識

【無性釈 (玄奘訳) <sup>38)</sup>】

- ① (眼等五内界)
- ②眼等五識所依眼界
- ③第六識所依眼界
- ④六外界
- ⑤六識界

と解釈している。『摂大乘論』II・5には、①～③が、六内界で、④が六外界、⑤を六識界とし、十八界を形成していることからわかるように、十一種の表象はまさに六根・六境・六識なる十八界である<sup>39)</sup>。しかし、十八界に相当する①～⑤の解釈は上記のように異なっており、まとめると相違点として以下の二点があげられる<sup>40)</sup>。

1. 世親釈においては、②の解釈が真諦以外は染汚意としており、これに対して真諦は染汚識としている。

2. 無性釈のチベット訳においては、②を意としており、③を意識、④を諸外処、そして⑤を五識としている。これに対し玄奘訳の無性釈は、②と③を眼界としているが、②を五識所依の眼界、③を第六識所依の眼界としている。また、⑤に対し六識ではなく五識であると訳述している。

以上のことから、十一種の表象の内、特に①～⑤に関しては、上記のような相違が見られる。これは、②と③の理解の仕方の相違によるものである。そうになると、②と③を「染汚意」、「染汚識」、「意識」、「意」、「眼界」にそれぞれ解釈していることにより問題となるのが、心意識説<sup>41)</sup>である。『摂大乘論』における心意識説<sup>42)</sup>については、袴谷憲昭氏の論文<sup>43)</sup>がある。袴谷氏の主張は、染汚意に対して、六識と同時に生起する資格を有するmanasであれば末那識の源流でありうるのであり、更にこのmanasと旧来のmanasとを峻別するのが、kliṣṭaという限定であるとしている<sup>44)</sup>。筆者もこの見解に従いつつ、②を解釈するならば、「染汚意」「染汚識」としている場合は、染汚意すなわち末那識あるいは末那識の源流となるべきものと解釈していると考えられ、「意識」ならば、これは、六識界の中の意識界のことであり、「意」とする場合は、『摂大乘論』I・6に述べられているように、二種の意、すなわち、無間滅識と染汚意の二種<sup>45)</sup>を意識して述べられていると考え、「眼界」と解釈するならば、これは単に十八界の中の眼界すなわち意根を意味すると思われる。ただし、玄奘訳の無性釈は②を五識所依の眼界としているが、これはたじつまが合わない。なぜなら、五識所依はこの場合五界（五根）であり、眼界ではない。玄奘訳は他の註釈等と異なり、①を訳述しておらず、かつ②を五識所依の眼界と訳述していることから、混乱が生じていると考えられる<sup>46)</sup>。無着は『摂大乘論』II・5において①～⑤は十八界に相当するとしつつも、註釈における②を考えると、これはどうしても十八界のどれにも当てはまらないと筆者は考える。やはり、②を「染汚意」と註釈において解釈していることと、『摂大乘論』で無着が①～⑤を十八界としている間には隔たりを感じざるを得ない。そうになると一つの見解として、②は『摂大乘論』の成立過程のある段階において付加されたものである可能性も考えられる。というのも、先にも述べたように、最古訳とされる、仏陀扇多訳においては、②の身体の所有者〔の表象〕に該当する部分が見



当たらず十種しか述べられていないからである。

### 3.3 『中辺分別論』における四識との関係について

『摂大乘論』における十一種の表象は、真諦訳<sup>47)</sup>の世親釈においては『中辺分別論』(*Madhyāntavibhāga*)の四識に大略されるとしている。そこで、本節では、『摂大乘論』の十一種の表象の内の特に①～⑤と四識の関係を考察する<sup>48)</sup>。『中辺分別論』相品第三偈には、識について以下のように説いている。

くく内は漢訳

artha-satvātma-vijñāpti-pratibhāsam prajāyate /  
vijñānaṃ nāsti cāsyārthas tad-abhāvāt tad apy asat // 3 //(I・3 M)

訳：物（対境）として〈似塵識〉<sup>50)</sup>、有情として〈似根識〉<sup>51)</sup>、自我として〈似我識〉<sup>52)</sup>、表象として〈似識識〉<sup>53)</sup>、顕現する識（虚妄分別）が生じる。しかし、これには物は存在しない。それは無い故に、それもまた有ではない。

ここでは、虚妄分別の自相が説かれ、四識が顕現するとしている。ここで問題となるのは、十一種の表象と四識の関係である。真諦訳の世親釈においては、十一種の表象が大略すると四識になるとしているが、はたしてどの表象がどの識等に相当するかについては記述されていない。これに対する先学の研究は数多くなされているが、見解が一致していない。そこで以下に諸先学の見解の相違を示す。

	似塵識	似根識	似我識	似識識
長尾説 <sup>54)</sup>	⑧④	①③	②	⑤
宇井説 <sup>55)</sup>	④	①	②③	⑤
葉説A <sup>56)</sup>	④	①	②③	⑤
葉説B <sup>57)</sup>	⑧	①	②	⑤ (③)
上田説 <sup>58)</sup>	④	①③	②	⑤

この様に宇井説と葉説Aは同じであるが、その他の説とは見解の一致が見られない。ここで問題となるのはまず、似塵識に相当する表象が⑧なのか、④なのか、それとも両者なのかという点と、③の表象が四識のどれに当てはまるの

かという点である。世親の註釈によれば、四識はそれぞれ六境、五根、染汚の意、六識であると解釈している<sup>59)</sup>。やはりここでも問題となるのは、染汚意 (kliṣṭam manañ) である。この染汚の意を長尾雅人氏は第七識、すなわち末那識であるとし<sup>60)</sup>、高崎直道氏はこれを意根であるとしている<sup>61)</sup>。

著作は世親の長行等を踏まえると、上記に示した対応関係について、③は四識のどれにも当てはまらないと考える。

### 3.4 『大乘莊嚴經論』述求品との関係について

次に『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrālaṅkāra) と『摂大乘論』との関係であるが、『摂大乘論』のチベット訳の無性積における④の表象について、片野道雄氏はMSU.K.において、④の表象を無性は「外処」と註釈していることから、十二処に配当する仕方も考慮している可能性を示唆しており、チベット訳の無性積のそれらは十二処、十八界に相当するということより、むしろ、『大乘莊嚴經論』述求品に詳細に説述されている三種三種の顕現として知られる、所取相としての顕現、及び能取相としての顕現ということが意図されているとしている<sup>62)</sup>。そこでこの節においては、その『大乘莊嚴經論』の該当部分を示す。

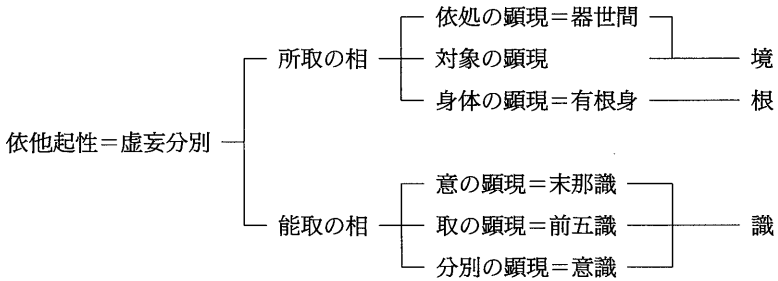
『大乘莊嚴經論』の述求品第三十七偈においては、依他起性について次のように述べられている。(以下、大乘莊嚴偈をM、その長行をVとする。)

trividhatrividhābhāso grāhyagrāhakalakṣaṇañ /  
abhūtaparikalpo hi paratantrasya lakṣaṇañ // 40 // (XI・40 M)

訳：各々三種の顕現である所取・能取を特徴とする虚妄分別が依他起の相である。

(XI・40 V)「各々三種の顕現である」とは、三種と三種の顕現を具えるということである。この場合、[はじめの] 三種の顕現とは、処と対象と身体の顕現であり、[次の] 三種の顕現とは、意と取と分別の顕現である。意とは一切時において汚染されているものである。取とは五識身である。分別とは、意識のことである。この場合、はじめの三種の顕現とは、所取を特徴としており、第二〔の顕現〕は、能取を特徴としている。よって、この虚妄分別は依他起の相である<sup>63)</sup>。

この様に虚妄分別は各々三種の顕現<sup>64)</sup>として語られている<sup>65)</sup>。竹村牧男氏はこの構造を次のように図式化している<sup>66)</sup>。



この偈一つ前にある、XI・39の偈とその長行において遍計所執性の定義がなされているが、それによると虚妄分別の因相が遍計所執相であり、この虚妄分別の所縁が遍計所執相であるとしている<sup>67)</sup>。

この節の冒頭にも触れた『摂大乘論』における表象と、上記の『大乘莊嚴経論』<sup>68)</sup>の各々三種の顕現との対応関係についても先学の見解を上記の竹村氏の図表を参照しつつ相違を以下に示す。

	片野説 <sup>69)</sup>	葉説B <sup>70)</sup>
依処の顕現=器世間	④	⑧
対象の顕現	④	④
身体の顕現=有根身	①	①
意の顕現=末那識 <sup>71)</sup>	②	②
取の顕現	⑤	⑤
分別の顕現=意識	③	③ (⑤)

この部分における無性の註釈は、先の三種の顕現についてのみ註釈するにとどまり、後の三種の顕現については触れていない<sup>72)</sup>。

上記のように竹村氏は意の顕現を末那識であるとしているが、これを先に挙げた『摂大乘論』や『中辺分別論』の該当部分を考慮すると、意界と解釈する可能性も残る。

また、依処の顕現=器世間を④の表象に当てはめるのか、⑧の表象に当てはめるのかにより意見が分かれている。

### 3.5 表象における問題点

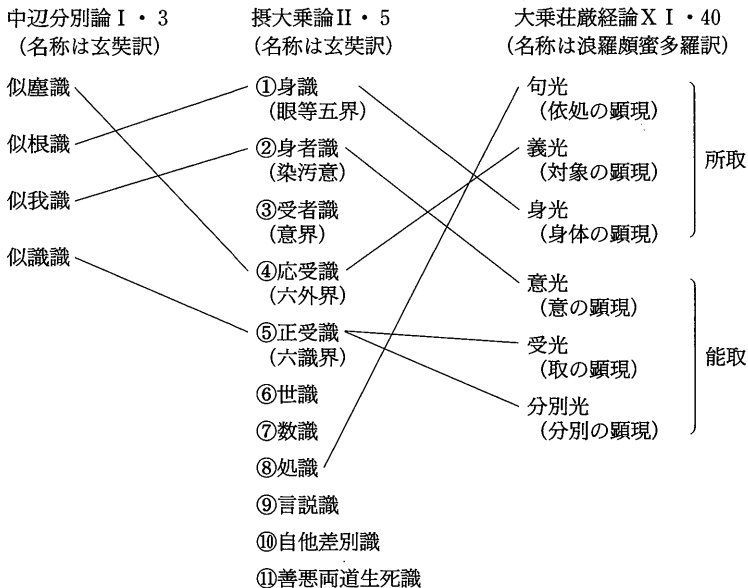
以上のように、『摂大乘論』に示されている表象について、それに関連する特に『中辺分別論』の四識説や『大乘莊嚴經論』に説かれている各々三種の顕現との対応について、先学の見解の相違を中心に示した。ここでやはり問題となるのが、①～⑤の諸表象を、どう無着・世親及び無性が理解していたかである。

まず、無着は『摂大乘論』において、十一種の表象は十八界を形成するものであると捉えているが、世親釈によると①～⑤について、十八界に染汚意即ち末那識の源流となるものを加えている。真諦訳に至っては②を染汚識とし、第七識の存在を明瞭にしている。これに対し、無性釈は、上記に示したチベット訳と玄奘訳における相違を見てもわかるように、②と③を「意」、「意界」、「意識」と訳述しており、解釈がチベット訳と玄奘訳では一致していない。

『中辺分別論』については、十一種の表象、特に①～⑤との対応関係については、上記のように先学の見解が異なる。『大乘莊嚴經論』においても同じ事が言える。そうなるやはり問題となるのが、染汚意と意であろう。これを意界（意根）と解釈するのと、末那識あるいは末那識の源流と解釈するのでは大きく異なる。筆者は、先学の見解及び上記の考察を踏まえ染汚意は、やはり袴谷氏の見解と同じく末那識あるいは末那識の源流であると確認できた。ただ、そう解釈することにより、各経論及び論師間において見解の相違が顕著になり、また理解するにあたり難解な部分もある。『摂大乘論』世親釈では、末那識を含め①～⑤を解釈していると思われるが、無性釈ではこの部分においては末那識の存在が認められない。また、『摂大乘論』の十一種の表象と『中辺分別論』の四識の顕現、及び『大乘莊嚴經論』の三種三種の顕現との対応関係であるが、上記に示した先学の見解からも分かるように対応関係は十分にあると思われるが、それぞれの対応関係となると、諸先学の見解は分かれている。やはり、これも意や染汚意をどう解釈するかに重点が置かれる。それに伴い、最古訳とされる、仏陀扇多訳においては、②が書かれていない点は重要であると考える。

## 4 まとめ

以上、本稿においては『撰大乘論』における依他起性、特に表象について考察した。今の段階では、①～⑤の表象に対する註釈の相違や、また先学のこの表象に対するの見解の相違を示すにとどめる。これに対する問題点として既に述べられているものも含め上記に挙げることができたが、これらの解決には、仏教思想における心意識説の理解が重要であり、これに伴い唯識思想では、いわゆる八識別体説や八識体一説の捉え方が重要である。特に「意」に対する見解は様々で、宇井・結城両氏による論争、これを踏まえての袴谷氏の見解など、数多くの先行研究がある。ただ、これらは、『瑜伽論』の該当部分<sup>73)</sup>や『撰大乘論』所知依分のアーヤ識説が述べられている中での考察が多く、十一の表象の観点からの考察はあまり見当たらない。今回は心意識説は著者の不勉強によりこれ以上深く考察することが出来なかったため、この点を今後の課題としたい。以下に筆者の考える、『撰大乘論』、『中辺分別論』及び『大乘莊嚴經論』の該当部分における対応関係を示す<sup>74)</sup>。



【注】

- 1) *MS. N.* 6 頁においては、無着の生存年代を紀元395-470年頃としている。著者もこの見解に従う。
- 2) 『大蔵経全解説大事典』雄山閣出版、1998年、441頁。
- 3) *MS. N.* 272-274頁参照。
- 4) 『顕揚聖教論』における三性説についての研究には以下のものがある。宇井 [1930] 205-359頁、結城 [1986] 397-463頁、毛利 [1991] (187)-(190) 頁、竹村牧男『唯識三性説の研究』78-79頁。
- 5) 『摂大乘論』のテキストについては、以下に挙げる漢訳とチベット語訳があるが、サンسكريット原典は現存しない。(漢訳はすべて大正大蔵経第31巻に収められている。)
  - 後魏 仏陀扇多訳『摂大乘論』
  - 陳 真諦訳『摂大乘論』
  - 唐 玄奘訳『摂大乘論本』
 以上の漢訳に加え、隨の笈多共行矩等訳の『摂大乘論釈論』から得られる。  
 チベット語は、Ye shes sde訳が一本存在する。又『摂大乘論』の註釈には、世親釈と無性釈があり、世親釈には、真諦訳、笈多共行矩等訳及び玄奘訳とチベット語訳の *Dipamkaraśrījñāna*訳がある。無性釈には、玄奘訳とチベット語訳の二本が存在する。
- 6) 『摂大乘論』に関しては、*MS.*を底本とし*MS. N.*を参照する。世親釈に*MSBh.*と漢訳(玄奘訳 No1597)がある。無性釈には、*MSU.*と漢訳(玄奘訳 No1598)があり、*MSU.K.*を参照する。また、『摂大乘論』の章・節分けの数字は、*MS. N.*に準じている。
- 7) 『摂大乘論』の三性説についての研究には以下のものがある。
  - 結城令聞『世親唯識の研究下』465-559頁、竹村牧男『唯識三性説の研究』79-87頁、荒牧 [1963] 29-67頁、田中 [1951] 15-34頁、武内 [1961] 73-84頁、竹村 [1975] 255-258頁。
  - 武内 [1961] においては依他縁起の世界は遍計所執性の世界であり、唯識義は依他起性の有と遍計所執性の無を示すとしている。
- 8) 『摂大乘論』の三性説(依他起性、遍計所執性、円成実性)に当たる漢訳を対照すると以下ようになる。(MS.N.274頁参照。)
 

〔仏陀扇多〕	他性相	妄想分別相	成就相
〔真諦〕	依他性相	分別性相	真実性相
〔達磨笈多〕	依他相	分別相	成就相
〔玄奘〕	依他起相	遍計所執相	円成実相
- 9) *MS.* 24-26. *MS. N.* 272-284頁、*MSBh. P.* 170b1-171b1. *D.* 143b3-144a6. 大正、31巻、337頁下-338頁中。*MSU. P.* 269a5-270b3. *D.* 219b6-221a2. 大正、31巻、398頁下-399頁下。『無性釈』は、竹村牧男『唯識三性説の研究』90頁註(40)にも述べられているように、チベット語訳と漢訳とかなり異なりがある。
- 10) 竹村牧男『唯識三性説の研究』80頁。

- 11) 同上。
- 12) 竹村牧男氏は、『唯識三性説の研究』79-86頁において、『撰大乘論』の三性説を、  
遍計所執性=名言所計  
依他起性=種子所生・剎那滅の、虚妄分別所攝の、唯だ識のみ  
円成実性=真如（依他起性中、遍計所執性のないこと）  
としている。また、どこまでも『解深密経』『瑜伽師地論』の教説をふまえたものである  
としている。しかし、三性説が識説と関係している点や、依他起性を表象としてとらえて  
いる点からも、『解深密経』『瑜伽師地論』の教説とは大きく異なると筆者は考える。むしろ、  
基本的三性説の記述に関しては、『中辺分別論』の記述の流れを踏まえていると思われ  
れる。
- 13) 唯識関係の基本的な諸経論における三性説全体の研究は数多くある。以下にそのいくつ  
かを挙げる。  
大野 [1952] 167-190頁、安井 [1953] 30-40頁、石川 [1956] 163-164頁、勝呂 [1965]  
35-40頁、氏家 [1968] 26-39頁、神谷 [1976] 215-218頁、荒牧 [1976a] 18-37頁、  
[1976b] 17-34頁。
- 14) *MS*, p.29. *MS*.N.II・11、303-304頁、*MSBh*.P.185b6-186a8. D.155a2-b1. 大正、31巻、  
346頁下-347頁上、*MSU*.P.286b1-286b8. D.234a7-234b6. 大正、31巻、409頁上-下、  
*MSU*.K.95-96頁。
- 15) 註26参照
- 16) *MS*, p.31. *MS*.N.II・15A、322-323頁、*MSBh*.P.175a8-175b1. D.147a5-7. 大正、31巻、  
341頁上、*MSU*.P.276b8-277a3. 大正31巻、403頁上-中、*MSU*.K.123-124頁。
- 17) *MS*, p.33. *MS*.N・II・18、337-338頁、*MSBh*.P.176b2-6. D.148a3-6. 大正、31巻、341  
頁下、*MSU*.P.278b3-5. 大正、31巻、409頁上-下、*MSU*.K.136-137頁。
- 18) *MS*, p.39. *MS*.N.II・29A、376頁、*MSBh*.P.183a5-7. D.153a3-4. 大正、31巻、345頁上、  
*MSU*.P.283b7-184b6. 大正、31巻、407頁中、*MSU*.K.173-175頁。
- 19) *MS*, p.39. *MS*.N.II・29B、376頁、*MSBh*.P.183a-183b1. D.153a4-6. 大正、31巻、345  
頁上、*MSU*.P.283b7-184b6. 大正、31巻、407頁中、*MSU*.K.175頁。
- 20) *MS*.N.377頁において、『阿毘達磨大乘経』における三性を以下のように述べている。  
『阿毘達磨大乘経』に、三性の名称が一応はあげられている。しかしそれは極めて略さ  
れた形であって、まだ十分に術語化されてはいないようである。かつ三性を直接説明す  
ることもないらしいから、三性が組織的に叙述された最初のものは、やはり『解深密  
経』なのであろう。
- 21) 依他起性の雑染性と清浄性については、氏家 [1970] 30-33頁、神谷 [1976] 734頁、  
武内 [1983] 125頁がある。
- 22) 表象について、*MS*.N.279頁において以下のように述べられている。  
この語は前章のアーヤ識以下の八識の「識」*vijñāna*と通じて用いられるが、「唯識」  
という時は一般的に専ら*vijñaptimātra*という。ただ、*vijñāna*が「知ること」「認識す

ること」という知の作用を主として示すのに対し、vijñaptiは「知らせる」という使役相から来た語で、主観の作用よりも、表現され知られている内容を具体的に指す場合が多い。本節の漢四訳はすべてvijñaptiを「識」と訳しているが、その他に「了」「了別」「表」などと訳されることもある。それ故、八識の識と区別して、「表象」あるいは「表象に識」と和訳した。

これを踏まえ長尾雅人氏の見解に従い、vijñaptiを「表象」と特に本稿においては表現する。

- 23) この語をめぐる研究が多くの先学によりなされている。従来の研究については、芳村 [1987] 255-271頁に詳しく述べられており、以下に記述する従来の研究についても、芳村氏の上記の論文に負う所が多く、これに重要だと思われる論文を加えて従来の研究について述べてみたいと思う。

この語をめぐる非常に重大な最初の指針は長沢実導氏によってなされたと思われる。長沢 [1952]、[1953] によれば、vijñapti, vijñaptimātra, vijñaptimātratāの各々の語にもつ異なった役割の違いを『撰大乘論』や『唯識二十論』『唯識三十頌』等の用例を用いて研究を行っている。

稲津紀三氏は、Inazu [1966] において『唯識二十論』におけるこの語の用例を検討し、vijñānaとの違いを指摘しており、稲津 [1968] においては、世俗的意識 (vijñāna) から真実の智 (jñāna) に転換したという事を指摘し、転依について言及をしている。

神谷信明氏は Kamiya [1973] において世親が対象を認識する機能の所有者とをしようとしなかった事を述べ、仏教において属性とその所有者とは区別されないのが一般的傾向であると述べている。

阿理生氏は阿 [1980] において唯識説、もしくは唯識思想の起源を言及し、また『解深密経』においてvijñaptimātraがvijñānaの対象として扱われている事実を指摘している点は重要であると考ええる。

勝呂信静氏は勝呂 [1982 b] 88-99頁において、vijñānaとvijñaptiの相違について、又『撰大乘論』におけるvijñaptiについて考察している。

舟橋尚哉氏は『初期唯識思想の研究』155-156頁において、『解深密経』におけるvitñāptiについて述べている。

竹村牧男氏は『唯識三性説の研究』79-97頁、において三性説の規定と十一の表象の関係を全般的に示している。

芳村博美氏は氏の論文、芳村 [1978a] [1978b] [1987] において、『撰大乘論』が従来の「虚妄分別」や「識」(vijñāna) にとってかわる三性説の中心概念としての新たな役割をvijñaptiに担わせたことを強調している。

最後に大崎昭子氏は大崎 [1979] においてvijñaptiに内在する時間を踏まえ、唯識独自の時間論を考察している。

- 24) 例えば芳村 [1987] 256頁においては、『二十論』『三十頌』『中辺分別論』におけるvijñ



aptiの役割について以下のように述べている。

『二十論』でみたVijñaptiの中心の特徴は、pratibhāsaをもってVijñaptiがあることであつた。色等のpratibhāsaをVijñaptiが持つのである。色等の顕現がVijñaptiという働きにおいて可能となつたのである。所取として執着される形態として色を可能にする、いわば契機となる。ゝはたらき、がVijñaptiであつた。顕現の一つのレベルで論ぜられる概念ではなかつた。しかしこの『中辺分別論』一章三偈で述べられているVijñaptiは顕現の一つに数えられている。

『三十頌』でみたVijñaptiの中心の特徴は、VijñānaとVijñaptiがゝはたらきをもつもの、とゝそのはたらき、という点で区別される中に見出された。この意味で、Vijñaptiは識なら識と他者によつてとらえられた固定的姿を意味しない。しかしこの『中辺分別論』一章三偈で述べられているVijñaptiは今註釈を考慮せず偈頌のみにおいてみると、一般的に我々がある固定的姿をもって執着する対象、すなわち、我々をとりまく環境としてのものがら (artha)、他人としての人々や生きもの (sattva)、自分自身等と同等のレベルで論ぜられる概念である。そこでは、諸法としてアビダルマ論者達によつて分析された、色や根や識のレベル、すなわち十二処や十八界の概念にすらほど遠い、我々が執着する日常的なもののあり方のレベルにおいてVijñaptiが論ぜられている。世親の註釈においてはじめて十八界に結びつけられている。

25) 芳村 [1987] 266頁参照。

26) MS.N.II・2, 275-276頁、MSBh.P.170b2-171a4. D.143b3-144a2. 大正、31巻、338頁上-中、MSU.Q. 269b4-270a8. D.219b6-220b8. 大正、31巻、399頁上-中、MSU.K.52-62頁。

この十一種の表象について、漢訳、及びチベット訳無性註等では以下のようになっている。(MSU.K.54-56頁をそのまま掲載。)

① 身体 (の表象)

(「身識」- 玄奘、真諦、笈多、仏陀訳)

五界 . . . (世親註)

有色根としての顕現 . . . (チベット訳無性註)

② 身体の所有者 (の表象)

(「身者識」- 玄奘、真諦、笈多、仏陀訳)

染汚の意 . . . (世親註)

意 . . . (チベット訳無性註)

眼等五識所依意界 . . . (玄奘訳無性註)

③ 受用者の表象

(「受者識」- 玄奘、真諦、笈多訳、「与受用識」- 仏陀訳)

意界 . . . (世親註)

意識 . . . (チベット訳無性註)

第六意識所依意界 . . . (玄奘訳無性註)

- ④ 彼所受（それによって経験される）表象  
（「彼所受識」－玄奘訳、「応受識」－真諦、笈多両訳、「彼所受用識」－仏陀訳）  
外なる色等の六界 ……（世親註）  
外処 ……（チベット訳無性註）  
六外界 ……（玄奘訳無性註）
- ⑤ 彼能受（それを経験する主体としての）表象  
（「彼能受識」－玄奘訳、「正受識」－真諦、笈多両訳、「受用識」－仏陀訳）  
六識界 ……（世親註）  
五識 ……（チベット訳無性註）  
六識界 ……（玄奘訳無性註）
- ⑥ 時間の表象  
（「世識」－玄奘、真諦、笈多、仏陀訳）  
輪廻相続の不断なること ……（世親註）  
三時としての顕現 ……（無性註）
- ⑦ 数の表象  
（「数識」－玄奘、真諦、笈多、仏陀訳）  
一などとして数えられる顕現 ……（チベット訳無性註、その他諸註積も同じ）
- ⑧ 場所の表象  
（「処識」－玄奘、真諦、笈多訳、「方処識」－仏陀訳）  
器世間 ……（世親註）  
村、林などとしての顕現 ……（チベット訳無性註、玄奘訳も同じ釈）
- ⑨ 言説の表象  
（「言説識」－玄奘、真諦、笈多諸訳、「仮意識」－仏陀訳）  
見聞覚知 ……（諸註積）
- ⑩ 自と他を区別する表象  
（「自他差別識」－玄奘、真諦、笈多諸訳、「自他分別識」－仏陀訳）  
我執我所執というように決定する身等の記識  
……………（チベット訳無性、玄奘訳も同じ釈）  
（世親註は注釈せず）
- ⑪ 善なる生の境位（善趣）や悪しき生の境位（悪趣）の中で、死んだり、生きたり  
することの現象  
（「善趣悪趣死生識」－玄奘訳、「善悪両道生死識」－真諦、笈多両訳、「善道悪道  
生滅識」－玄奘訳）  
天人地獄畜生餓鬼生死としての顕現  
……………（チベット訳無性註、玄奘訳も同じ釈）世親註は注釈せず）

以上が片野氏がまとめた十一種の表象である。本文にも述べているように、②身体  
の所有者（の表象）について仏陀扇多訳には訳述がない。しかし、片野氏は上記のように「身

者識」が仏陀扇多訳にあるとしている。

27) *MS.N.* 278頁。

28) 同上。勝呂〔1982b〕96頁には以下のような記述がある。

『摂大乘論』におけるvijñaptiは、心が心を見ること、すなわちvijñāna（主観的認識作用）それ自身が、見られたものであるvijñaptiとして、表象されたものであることを意味していると思われる。

29) 例えば真諦訳の世親釈には「十一識」という記述がある。大正、31巻、181頁中。

30) この部分に該当する仏陀扇訳は以下の通りである。大正、31巻、100頁下。

彼復何等身与受用識。彼所受用識。受用識。時識。数識。方处差別仮意識。自他分別善道惡道生滅識。是中所有身与受用識及彼所受用識。及受識所有時数分別仮識者。彼語言習種子因生故。所有自他分別識。彼身見習種子因故。所有善道惡道生死者。彼為因縁習種子因故。

これによると、②に相当するものが見当たらない。宇井伯寿氏は『摂大乘論研究』388頁において、以下のように既に②に相当するものが見当たらない点を指摘している。

仏陀扇多のみは初めて三識に当たる所を身与受用識として後に之を六内眼等塵と釈し、身者識を明瞭に出すことをなして居ない。この点はなお研究を要すべきものであろうか。

また、*MS.N.*において記述がなく、また*MSU.K.*54頁においては、この部分に「身分識」があるとしている。

31) *MSU.K.*54頁及び宇井伯寿『印度哲学研究』六、383-384頁参照。

32) *MSU.K.*58頁。一部文章を変更し引用した。

33) 葉阿月『唯識思想の研究』134-135頁。

34) 何故十一種の表象のうち①～⑤を扱うかと言えば、*MS.N.*279頁において述べられているように、十一種のうち①～⑤が根本的なものであり、⑥以下はそれの特殊な場合であると言われるからである。

35) このことは、*MSU.K.*56-58頁において既に指摘されているので、ここではそれを引用し考察を行った。

36) *MSBh.*P. 143b3-5. 大正、31巻、181頁下、285頁上、338頁上。

37) *MSU.P.* 269a4-6. *MSU.K.* 52頁。

38) 大正、31巻、399頁上。

39) *MS.* p.26. *MS.N.*284-285頁においても①～③は六内界であり、④は六外界で⑤は六識界であることが示されている。そうなると①～⑤は十八界に相当することになる。

40) この相違点は*MSU.K.*56-58頁において既に述べられている。しかし、片野氏は、玄奘訳の無性釈における①～⑤の解釈を世親釈と同じ訳述をしていると述べているが、筆者はこの点においては見解が異なる。本文参照。

41) 仏教における心意識についての研究は数多く存在する。ここで重要となる染汚識(*kliṣṭamanas*)、即ち末那識に対する宇井伯寿氏及び結城令聞氏の論争に関しては、羽生〔1987〕(1)、(9)頁註(1)を参照。

- 42) 『撰大乘論』における心意識、特に末那識についての研究は以下のものがある。  
舟橋 [1969] 39-40頁、片野 [1965] 231-234頁。
- 43) 袴谷 [1978]。
- 44) 袴谷 [1978] 304頁における袴谷氏の主張を羽生 [1987] (I)頁においては、よくまとめているので今回はそれをそのまま引用した。
- 45) *MS.p. 4*、*MS.N. 85-86*頁。
- 46) 羽生 [1987] (3)頁においては、『瑜伽師地論』「本地分」に眼識乃至身識の五識の所依について、俱有依としての五根、等無間依としての意 (*manas*) = 無間滅意、種子依としてのアーヤ識の三種があるとされている点を指摘している。
- 47) 大正、31巻、181頁下。
- 48) 『撰大乘論』における十一種の表象と『中辺分別論』における四識との関係については以下の研究がある。  
上田義文『撰大乘論購読』30-34頁、*MS.N. . 314-315*頁、葉阿月『唯識思想の研究』53-58、130-135、216-220頁。
- 49) *MVBh.p.18, II.21-22. MSBh.N.221-222*頁、大正、31巻、464頁下、451頁中。
- 50) 世親の長行によれば、「物(対境)として顕現す」とは色などのあり様をもってして顕現することであるとしている。以下、53)までは*MSBh.N.222*頁を参照。
- 51) 世親の長行によれば、「有情として顕現する」とは自分や他人の身体によって、五種の感覚器官として(顕現しているの)であるとしている。
- 52) 世親の長行によれば、「自我として顕現する」とは染汚意(としての顕現)であるとしている。
- 53) 世親の長行によれば、「表象として顕現する」とは六種の識(の顕現)であるとしている。
- 54) *MS.N. 314-315*頁。
- 55) 宇井伯寿『印度哲学研究』六、385頁。
- 56) 葉阿月『唯識思想の研究』134頁。
- 57) 同上219頁。
- 58) 上田義文『撰大乘論購読』30頁。
- 59) *MVBh.p.18. MSBh.N. 222*頁、大正、31巻、464頁下。
- 60) *MS.N. 382*頁。
- 61) 高崎直道『唯識入門』94頁。
- 62) *MSU.K. 58*頁
- 63) *MSA.XI, p64, l,27-p65, l.5. MSA.H.181-182*頁、*MSA.U.221*頁、大正、31巻、613頁下-614頁上。
- 64) 虚妄分別は「顕現」(*paratibhāsa*)を伴って語られる場合が多い。上田義文『唯識思想入門』25-37頁において、*pratibhāsa*を基本概念とする唯識説が虚妄分別の内容も含めて述べられている。

- 65) この部分の安慧と無性の注釈において虚妄分別を説明する箇所は見当たらない。
- 66) 竹村牧男『唯識三性説の研究』98頁。
- 67) *MSA*. VI, p.64, ll. 13–26. *MSA*. H.181頁、*MSA*. U.220頁–221頁、大正、31巻、613頁下。
- 68) ここで『大乘莊嚴經論』XI・40の本頌の解釈において問題となる点が二点挙げられる。  
 一点目は、既に指摘されているが、trividhatrividhābhāsaとgrāhyagrāhaka-lakṣaṇaという語は、ここで虚妄分別にかかるbahuvrīhiであり、これまでの研究においては、この部分の解釈が曖昧であったと思われる。二点目は、本頌後半のparatantrasyaの格についてである。これはもちろん属格であるが、そうなることとabhūtaparikalpaとlakṣaṇaは主格でなので、paratantra (依他起) と虚妄分別が必ずしも同一であるかということである。かといって、突き詰めればこの二つは同じとなるので、この両者の関係は微妙であると考ええる。世親の長行においても同様の格関係で述べられており、依他起性と虚妄分別との関係を改めて考える必要がある。
- 69) *MSU*. K.58頁。
- 70) 葉阿月『唯識思想の研究』219頁。
- 71) 片野氏は*MSU*. K.58頁において、この部分を「意 (中辺分別論のいう我) としての顕現」としている。
- 72) 『大乘莊嚴經論』無性釈については、今回チベット語原典にあたることができなかった。この部分については、下川辺季由氏の和訳があるので参照した。下川辺〔1985〕33頁。
- 73) これに関しては、羽生〔1987〕や袴谷〔1979〕などがある。
- 74) この対応関係を図示するにあたっては、葉阿月『唯識思想の研究』134、217、219頁、*MSU*. K.58頁、上田義文『撰大乘論購読』31、30頁、宇井伯寿『印度哲学研究』六、385頁、高崎直道『唯識入門』94頁などの先行研究を十分に踏まえたものであり、これらをもとに図示を試みた。

【Abbreviations】

- 印仏研 『印度学仏教学研究』、日本印度学仏教学会。
- 大正 『大正新修大蔵経』。
- D The Sde dge edition of the Tibetan Tripiṭaka.
- MS*. *La somme du grand véhicule d'Asaṅga*, Tome I ; Texte, ed. par É. Lamotte, Louvain, 1973.
- MS*. N. 長尾雅人『撰大乘論 和訳と註釈』上・下、講談社、1982・1987年。
- MSA*. Asaṅga, *Mahāyāna-Sutrālaṅkāra*, Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule selon le Système Yogācāra, Tome I ; Texte, éd. par S. Lévi, Paris, 1907.
- MSA*. U. 宇井伯寿『大乘莊嚴經論研究』岩波書店、1961年。
- MSA*. H. 袴谷憲昭・荒井裕明校注『新国訳大蔵経 瑜伽・唯識12 大乘莊嚴經論』大蔵出版、1993年。
- MSBh*. Theg pa chen po bsduṣ pa'i 'grel pa (*Mahāyāna-saṃgrahaḥāṣya*), P. No. 5551

- [Li 141b2-232b5] (Vol. 112), D. No. 4050. [Ri 121b1-190a7] (Vol. 12).  
MSU. Theg pa po bsdus pa'i bshad sbyar (*Mahāyānasaṃgrahopānibandhana*), P No. 5552 [Li232b5-356b7] (Vol. 113), D. No. 4051. [Ri190b1-296a7] (Vol. 12).  
MSU.K. 片野道雄『インド仏教における 唯識思想の研究』文栄堂書店、1975年。  
MVBh. *Madhyāntavibhāga-Bhāṣya*, A Busshist Philosophical Treatise, ed. by G. M. Nagao, Tokyo, 1964.  
MVBh.N. 長尾雅人訳『中辺分別論』『大乘仏典15 世親論集』中央公論社、1976年。

【参考文献】

研究書（論文含む）

(A) 欧文

Inazu, Kizow

1966 “The Concept of Vijñapti and Vijñāna in the Text of Vasubandhu’s *viṃśakā-vijñaptimātratā-siddhi*” in *JIBS*, vol. 15-1, pp. (1)-(7) [pp. 474-480].

Kamiya, Nobuaki.

1973 “On “vijñāna” in the Yogācāra School” *Tōkai Association of Indian and Buddhist Studies*, no. 17

(B) 和文

B-1 単行本

B-1-1 原典翻訳

片野道雄

『インド仏教における 唯識思想の研究』文栄堂書店、1975年。

長尾雅人

『撰大乘論 和訳と註解』上・下、講談社、1982・1987年

B-1-2 単行本

宇井伯寿

『撰大乘論研究』岩波書店、1935年。

『印度哲学研究』六、岩波書店、1965年。

上田義文

『撰大乘論購読』春秋社、1982年。

竹村牧男

『唯識三性説の研究』春秋社、1995年。

高崎直道

『唯識入門』春秋社、1992年。

舟橋尚哉

『初期唯識思想の研究』国書刊行会、1976年。

横山紘一

『唯識の哲学』平楽寺書店、1979年。

結城令聞

『世親唯識研究 下』大蔵出版、1986年。

B-2 論文

荒牧典俊

1976a 「三性説ノート(1)」『東洋学術研究』第15巻1号、18-37頁。

1976b 「三性説ノート(2)」『東洋学術研究』第15巻2号、17-34頁。

石川良晃

1956 「三性説序説-唯識説の成立について-」『印仏研』第4巻2号、163-164頁。

宇井伯寿

1930 「三無性論の研究」『印度哲学研究』第6号、205-358頁所収。

氏家昭夫

1968 「唯識三性説について」『密教文化』第85号、26-39頁。

1970 「唯識思想における雑染と清浄の問題」『密教文化』第93号、22-35頁。

大野義山

1952 「三性説餘論」『哲学年報』第10集、167-190頁。

大崎昭子

1979 「唯識哲学における時間論的特質(-)」『花園大学研究紀要』第10号、147-170頁。

片野道雄

1965 「撰大乘論における心意識」『印仏研』第13巻1号、231-234頁。

神谷信明

1976 「三性説について」『印仏研』第24巻2号、215-218頁。

下川辺季由

1985 「無性造『大乘莊嚴広註』和訳(2)-求法品34頌~52頌-」『大崎学報』第138号、29-79頁。

勝呂信静

1965 「成唯識論における三性説について」『印仏研』第13巻1号、35-40頁。

1982a 「唯識説の体系の成立」『講座・大乘仏教』8-唯識思想、77-112頁所収。

1982b 「唯識説における縁起の思想」『大崎学報』第135号、205-227頁。

武内紹晃

1960 「世親親撰大乘論所知相分の組織」『龍谷大学論集』第364号、19-26頁。

1961 「撰大乘論における唯識義と三性説の関係に関する一考察」『仏教学研究』第18、19号、73-84頁。

1983 「依他起(パラタントラ)と他力」『龍谷教学』第18号、122-136頁。

竹村牧男

- 1975 「『撰大乘論』の三性説—世親釈の名の理解を手がかりに—」『印仏研』第23巻2号、255—258頁。

田中順照

- 1951 「撰大乘論における三性説」『密教文化』第17号、15—34頁。

長沢実導

- 1952 「唯識実相Vijñaptimātratāについて」『日本仏教学会年報』第18号、59—82頁。  
1953 「vijñaptiとvijñāna」『印仏研』第1巻2号、162—163頁。

袴谷憲昭

- 1978 「『大乘莊嚴經論』散文箇所諸問題について」『東洋文化研究所紀要』76、197—309頁。  
1979 「Vinīśayasamgrhaṇiにおけるアーヤ識の規定」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第36号、1—26頁。

羽生裕彦

- 1987 「染汚意説成立過程に於ける問題点」『東洋大学大学院紀要』第24集、(1)–(12)頁 [127—138頁]。

舟橋尚哉

- 1969 「阿頼耶識思想の成立とその展開—末那識の成立をめぐって—」『大谷学報』第49巻2号、31—48頁。

阿理生

- 1980 「瑜伽行と唯識説」『日本仏教学会年報』第45号、73—85頁。

毛利俊英

- 1991 「『顕揚聖教論』7-kā. 9について」『印仏研』第39巻2号、(187)–(190)頁 [865—868頁]。

結城令聞

- 1986 「顕揚聖教論に現れた三性・三無性説」『世親唯識の研究 下』大蔵出版、397—463頁。

芳村博実

- 1978a 「初期唯識論書におけるVijñaptiをめぐって」『印仏研』第27巻1号、178—179頁。  
1978b 「vijñptiについての一考察(1)」『仏教学研究』第34号、58—72頁。  
1987 「vijñaptiについての一考察(2)」『仏教学研究』第43号、255—285頁。